

平成 21 年 4 月 15 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19830072  
研究課題名（和文） 「新しい公共」論の系譜学：官僚制の政治理論  
研究課題名（英文） The Politics of Bureaucracy  
研究代表者 野口雅弘（NOGUCHI MASAHIRO）  
岐阜大学教育学部・准教授  
研究者番号：50453973

## 研究成果の概要：

「ウェーバー的な官僚制論」といわれるものは、マートンの逆機能など、多くの批判を受けてはきたが、それでも官僚制論の基本とされてきた。それは、大規模組織に、多くの構成員を包摂し、彼らをきびしく規律化することで成り立ち、そうして達成された効率性ゆえに拡大を続ける「鉄の檻」という官僚制理解である。しかしこれは、グローバル化と新自由主義化の傾向において「リキッド・モダニティ」（バウマン）がいわれるなかで、大きな修正を求められている。

ところが、「官から民へ」、「小さな政府」、住民との〈協働〉（「新しい公共」論）などの、近年の官僚制をめぐる議論では、旧来の官僚制理解を前提にしつつ、「大きすぎ」で、「抑圧的」な官僚制を攻撃するという論法がしばしば使われている。

本研究は、こうした状況に対して、政治理論の古典文献を再読解することを通じて応答しようとする試みであり、その成果は、以下の二つのテーゼにまとめることができる。ひとつは、「脱政治化された秩序」と官僚制の相関性であり、いまひとつは、官僚制とアソシエーションのジレンマである。

前者の「脱政治化」とは、政治的な抗争関係が顕在化しないように作用する言説を問題化しようとするタームである。政治的な抗争が封印されると、現状において自明視されている「慣習」が批判的に検討され、熟慮され、そうして変容するという可能性が閉ざされてしまう。このような「脱政治化」は、ある意味での経済的「合理性」を一元的に貫徹しようとする新自由主義から調和的な秩序構想のなかで政治的コンフリクトの契機を根絶しようとする儒教システムにまで見いだすことができる。

以上のような観点からすると、官僚制的な組織が「小さく」なったとしても、それで問題が解決するわけではなく、さまざまな政治的抗争が政治のシーンから見えにくくなることにともなう問題があることが見えてくる。本研究は、ウェーバーの『儒教と道教』を「脱政治化された秩序」の分析の書として受け止め、そこにおける官僚制支配の機制を検討した。

後者の観点（官僚制とアソシエーションのジレンマ）からすると、（抑圧的で、画一的な）官僚制という「悪」に対して（自発的な）アソシエーションという「善」が対抗するという思考では、自由なアソシエーション、あるいは〈民〉の活動によって（何らかの形で保持されるべき）「普遍性」が底割れするという連関を見落としかねないということになる。

たしかにマルクスのヘーゲル批判にあるように、官僚制による「普遍性」の僭称にともなう問題も大きいし、実際「日本官僚制」批判ではこの側面が強調される十分な理由があった。しかし、今日、〈官〉の縮小のなかで別の問題状況が出てきている。こうしたなか、ウェーバーのアメリカ論を、官僚制とアソシエーションのジレンマを引き受けながら思考しようとした議論として検討することは重要になってきている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：社会科学・政治学

キーワード：新しい公共、官僚制、ウェーバー、『儒教と道教』、アーレント、カフカ

### 1. 研究開始当初の背景

近年、「鉄の檻」という官僚制のイメージは時代遅れで、もはや現状に合致しないという議論が、とりわけ社会理論の領域から出されている。たとえば、ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ——液状化する社会』やリチャード・セネット『不安な経済／漂流する個人——新しい資本主義の労働・消費文化』などである。

もちろんこうした議論は、行政の現場における変容ともリンクしている。新自由主義的な方向性において「小さな政府」が唱えられ、またそれと呼応するかたちで、住民やNPO、ボランティアを積極的に「動員」しようとする議論がなされている。「新しい公共」論とは、公共性を「官」だけが独占するのではなく、NPOや企業なども含めたネットワークによって担おうとする議論を指す。

このような状況のなかで、従来の官僚制論（いわゆるウェーバー的な官僚制）は再検討を求められており、本研究はこうした課題に応えようとするものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、二つである。

まず、上記のような「新しい公共」が論じられる状況をつよく意識しつつ、ウェーバー、アーレント、カフカなどの官僚制論を再検討し、その限界と今日的意義を明らかにすること。

そして第二に、そうして検討された彼らの政治理論を手がかりにしながら、現在の状況を批判的に分析する理論を形成することである。

### 3. 研究の方法

研究は、おもに四つの方法によった。

まず、行政学の専門家にインタビュー調査

を行なった。今回は、今村都南雄（中央大学）教授、西尾隆（国際基督教大学）教授から話をうかがった。

第二に、日本の状況を比較の視座のもとで考察するために、ドイツにおける官僚制とアソシエーションをめぐる議論状況を調べた。ドイツ連邦議会の議事録を検討する一方で、こうした関連で、クラウス・オッフエ『アメリカの省察——トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』の翻訳に取り組んだ。

第三に、関連する資料収集のために、現地調査を行なった。カフカに関連して、プラハのカレル大学図書館および古文書館、ウェーバーに関連して、ハイデルベルク大学図書館およびアルフレート・ウェーバー・インスティテュート、アーレントに関連して、オルデンブルク大学のハンナ・アーレント・センターなどを訪問し、そこで調査を行なった。

最後に、マックス・ウェーバーやハンナ・アーレント、あるいはフランツ・カフカらの官僚制をめぐる一次文献、二次文献に取り組んだ。

### 4. 研究成果

ウェーバーは、プロイセンの軍隊とテイラー・システムをつなげながら、そうした時代の組織をモデル化する形で彼の官僚制理解を形成した。彼の議論で「合理性」が強調されるのは、まさにこうした時代的背景ゆえである。

しかし今日、ウェーバーがその理論化において想定していたような、大規模組織に多くの構成員を包摂し、彼らを規律化、管理することで成り立つような形態は、過去のものになりつつある。S・ウォーリンが『政治とヴィジョン』の前半であれほど強調した「組織化の時代」が、あとから付け加えられた後半

では、ネットワーク型の権力の分析に席を譲っているのは、こうした重心の変化をよく物語っている。

しかしながら、近年の日本の官僚制をめぐる議論では、こうした変容が十分に受け止められていないように思われる。たとえば、「大きな政府」か、「小さな政府」かという議論の仕方に、そうした傾向を見ることができる。こうした議論では、〈民〉の自由を拘束し、自発性を奪ってしまいかねない「大きな政府」という、「鉄の檻」的な官僚制イメージが前提とされ、それを「小さく」すれば問題が解決するとされる。

もちろんマックス・ウェーバーの官僚制論にも、「鉄の檻」的な官僚制への警戒がある。しかし、それによって彼の官僚制への洞察のすべてが組み込まれるわけではない。本研究の成果は、ウェーバーの時代制約性を明らかにしつつ、それと同時に、そうした時代性によって見えなくされていた彼の理論のアクチュアリティを示したことである。論点は、相互に関係するが、以下の二点にまとめることができる。

まず、ウェーバーの官僚制論は、大きい／小さい、規律化が強い／弱いというよりは、「脱政治化」と関係していることに注目し、この論点を、とりわけ彼の『儒教と道教』の再読解を通じて明らかにし、関連する論文を発表し、報告をした。

「脱政治化」とは、政治的な抗争関係が顕在化しないように作用する言説を形容するタームであり、政治的な抗争が封印されると、現状において自明視されている「慣習」が批判的に検討され、熟慮され、そうして変容するという可能性が閉ざされてしまう点を問題化しようとするものである。

論文「官僚制（マックス・ウェーバー）」岡崎・木村編『はじめて学ぶ政治学』ミネルヴァ書房、論文「デマゴグ以後——マックス・ウェーバーと脱政治化の問題」『現代思想』、報告「『小さな政府』と〈協働〉の時代における官僚制をマックス・ウェーバーから考える」早稲田大学政治経済学術院ファカルティワークショップなどが、こうした系列の研究成果である。

ウェーバーは儒教的な世界を分析するなかで、そこにおけるような脱政治化された秩序と官僚制的な支配の適合性を論じている。このような見方によれば、「小さな政府」であれば問題が少ないわけではなく、住民との〈協働〉が政治的なコンフリクトとそれをめぐる政治的な議論の可能性を閉じてしまうという問題が見えてくる。

現代の日本における、いわゆる「新しい公共」論に、住民との緊密な協力関係を唄ったDDR（旧東ドイツ）の Volkspolizei（人民警察）を重ねることは、いささか行き過ぎかもしれない。それでも、「脱政治化」と官僚制という視座は、「新しい公共」論が行政の現場において無批判に広がりつつあるなかで、意味があるものと考えられる。

二つ目の成果は、官僚制とアソシエーションの関係性についてのものである。「鉄の檻」的な官僚制論においては、官僚制という「悪」に対して自由な結社が「善」として対置されることになる。しかし、ウェーバーのアメリカ論では、自由なアソシエーションが「普遍性」を崩していくという連関が指摘されている。つまり、ウェーバーの議論は、官僚制とアソシエーションを一定のジレンマの相のもとで考察しており、官僚制が一時的に自発的結社を抑圧するという側面と、〈民〉の活動が不均衡を生み、そしてそれを拡大していくという両面を同時に視野に収めているのである。

クラウス・オッフエのアメリカ論（『アメリカの省察——トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』法政大学出版局）は、まさにこうした論点をひとつのテーマとした研究であり、上のような問題意識のもとで翻訳し、刊行した。

こうした観点からすれば、近年の「官僚制批判」は〈官〉をめぐるさまざまな問題を非難するあまり、それがもってきたある種の「普遍性」を掘り崩す危険性があることがわかる。

もちろん「天下り」などの形をとる既得権の問題や、無駄な公共事業など、今日、〈官〉をめぐる問題はたくさんある。しかし、そうであるからといって、これまで行政によって担われてきたサービスを、民営化したり、ボランティアに委ねれば、それにとまなう問題も出てくる。むしろ重要なことは、官僚制とアソシエーションのジレンマを引き受けながら思考するということになろう。

なお、官僚制をめぐる本研究は、それと関連するトピックとも接続することとなった。「保守主義」とその変容をめぐる研究（論文「信条倫理化する〈保守〉——ウェーバーとマンハイムを手がかりにして」『現代思想』、報告「クリストル・ベル・シュトラウス Irving Kristol, Daniel Bell, Leo Strauss ——ネオコン知識人研究のための予備的考察」大阪大学グローバルCOEワークショップ「1989/90年の転換期と知識人」、大学の変容と官僚制化の問題を扱った研究（論文「比較と責任——

マックス・ウェーバーの学問論」西山・宮崎編『哲学と大学—近代の哲学的大学論の系譜学と人文知の未来』(未来社)、またウェーバーの『儒教と道教』における「比較」の意味をめぐる考察(論文「比較の理由—ウェーバー『儒教と道教』再読』『創文』、報告『儒教とピューリタニズム』再考—ウェーバーにとって比較とは?」ヴェーバー研究会 21)などが、それである。論文や報告のタイトルには明示されてはいなくても、本研究の期間に公にした研究の多くが、何らかの形で、官僚制をめぐる本研究の副産物的な性格をもっていることを記しておきたい。

最後に、ウェーバー以外の、カフカやアーレントについてもリサーチし、ウェーバーに関係する諸論文における註などの形で部分的に成果を表出したが、単独の研究としては期間内に活字として成果を発表することはできなかった。今回の研究を踏まえうえて、近いうちに成果を発表していくつもりである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①野口雅弘「比較の理由—ウェーバー『儒教と道教』再読』『創文』第520号、2009年6月刊行予定、査読なし。

②野口雅弘「一次資料から迫るウェーバーのナショナリズム—今野元『マックス・ヴェーバー—ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』『思想』2008年8月号、52-60頁、査読なし。

③野口雅弘「デマゴグ以後—マックス・ウェーバーと脱政治化の問題」『現代思想』2008年1月号、86-97頁、査読なし。

④野口雅弘「近代から文化へ—冷戦の終焉以後のマックス・ウェーバー」『創文』第503号、2007年11月、11-14頁、査読なし。

⑤野口雅弘「信条倫理化する〈保守〉—ウェーバーとマンハイムを手がかりにして」『現代思想』2007年11月臨時増刊(総特集:マックス・ウェーバー)、118-133頁、査読

なし。

[学会発表] (計5件)

①野口雅弘「クリストル・ベル・シュトラウス Irving Kristol, Daniel Bell, Leo Strauss—ネオコン知識人研究のための予備的考察」、大阪大学グローバル COE ワークショップ「1989/90年の転換期と知識人」、於:法政大学市ヶ谷キャンパス、2009年3月21日。

②野口雅弘「『儒教とピューリタニズム』再考—ウェーバーにとって比較とは?」、第2回「マックス・ヴェーバー研究会 21」、於:東洋大学、2009年3月15日。

③野口雅弘「マックス・ウェーバーの学問論—大学のアメリカ化と知識人の『責任』」、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学研究センター」(UTCP)、公開共同研究「哲学と大学」第5回、於:東京大学駒場キャンパス、2008年7月3日。

④野口雅弘「『小さな政府』と〈協働〉の時代における官僚制をマックス・ウェーバーから考える」、早稲田大学政治経済学術院ファカルティワークショップ、於:早稲田大学、2008年4月30日。

⑤野口雅弘「『闘争と文化』をめぐる」、思想史研究会。於:成蹊大学、2007年4月28日。

[図書] (計5件)

①野口雅弘「デモクラシー」、飯島昇藏、佐藤正志、太田義器編『現代政治理論』おうふう、2009年3月、33-52頁。

②野口雅弘「比較と責任—マックス・ウェーバーの学問論」、西山雄二、宮崎裕助編『哲学と大学—近代の哲学的大学論の系譜学と人文知の未来』未来社、2009年3月、120-136頁。

③クラウス・オッフエ(野口雅弘訳)『アメ

リカの省察——トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』法政大学出版局、2009年1月。

④野口雅弘「官僚制(マックス・ウェーバー)」、岡崎晴輝、木村俊道編『はじめて学ぶ政治学』ミネルヴァ書房、2008年、160-170頁。

⑤野口雅弘「合理性と悪」、太田義器、谷澤正嗣編『悪と正義の政治理論』ナカニシヤ出版、2007年、109-134頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

## 6. 研究組織

(1)研究代表者 野口雅弘

(MASAHIRO NOGUCHI)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：50453973

(2)研究分担者

(3)連携研究者